

医学研究センター

研究主任部門

池淵 研二

(部門長, 医学部 輸血・細胞移植部 教授)

はじめに

実は研究主任部門の役割とは何だろうといろいろな思案する1年半でした。医学研究センターの他の部門に約1年遅れでスタートした部門であるため、まだまだ未解決のテーマが沢山残されています。

研究主任部門の役割としてはっきりしていることは、研究主任の先生方に2つの自覚を持っていただき尽力してもらえるような体制を早く構築することです。研究主任に期待する1つ目の自覚は基本学科において研究全体の責任者である自覚であり、研究指導、研究体制の整備、情報提供、研究費の獲得、等に尽力していただけるよう雰囲気造りをすることです。2つ目の自覚は基本学科の研究費を適正に運用

する責任者であることです。これは不正に使わないように監視していただくこと、とも読めます。

こう記載すると研究主任とはなんと堅苦しい立場だなあと心配されるかも知れませんが、きちんと役割を果たしていただければ、研究成果が上がり、業績が追っかけてくる、研究費が取りやすくなるなど、楽しみもどんどん増えてきます。

情報の伝達と共有

医学研究センターの各部門からホットでかつ研究を遂行する上で“ため”になる情報が発信されます。それできるだけ完全に基本学科内の全ての研究員まで知らしめることも重要な役割です。

基礎医学と臨床医学に関する講演会、知的財産管理部門が提供する種々の特許取得のためのノウハウに関する講演会、など目白押しで企画され、重要な情報提供の場として機能しています。

学内共同研究の推進

学内の研究員がお互いを知り、タイムリーに共同研究が構築できるよう手助けすることも主任部門の役割と考えました。研究者の活動内容、興味の範囲をお互いに紹介し合い、学内に新規の共同研究体制が敷けるようにしようと計画しています。偶然ですが学内グラント申請書、学外グラント申請書などの評価をする仕事に参加させていただき、研究者が研究費を獲得すべく非常に労力をかけて作成された文書を並列で一挙に見ることができ感激しました。その内容を広くホームページ上に研究者紹介コーナーとして掲載できないかと検討しています。知的財産部門のアドバイザーの先生に質問したところ、概ね大丈夫との判断をいただきましたが、学内者や学生がホームページを見てこれを学外者に伝えることができる余地がある点が懸念材料で、知的財産の保守が完全にはできないとアドバイスをいただきました。研究主任部門の依頼に対し協力し研究内容を掲載したばかりに、外部で先に成果を出され論文化されたり特許取得されたりするような事態も稀ながら起こりえるから、リスクフリーではないと最終意見をもらいました。

そこで目下平成18年度と19年度に学内グラントへ申請された研究者に向けて、これまでの研究成果と論文を中心に掲載させていただき、知的財産に関わりそうな部分(多くは研究計画・方法に述べてある内容)は削除した形で掲載させていただくよう案内をしているところです。これまでの研究経歴を示すことができれば研究者のアクティビティーが分ります。このグラント申請書の掲載がうまく進めば、次に科学研究費と厚生科学研究費の申請書に若干手を加えていただいたものを掲載させていただくよう募集しようと計画しています。別の形としては研究者が発表された論文や学会発表のタイトルと概要を掲載させてもらうことも募集しようと考えています。当然ですが、研究者がオリジナルな研究者紹介原稿を作成していただけるのがベストです。

つまりこれを読んだ読者がその内容から「その研究者と話がしてみたい」、と思ってもらえるような内容を公開していきたいと願っています。

基本学科の研究基盤の管理

研究主任は基本学科の研究環境の統括管理者であることを認識していただくことも目標として掲げています。実際には「場と物」に関する数回のアンケート調査を完了させることでしたが、まだまだ素地造りができていないことを実感させられました。アンケート調査完了までには随分と時間と労力がかかりました。

「ケタミンの保有状況調査」を実施した時ですが、「隅々まで調査することは無理だ」、「すでに退職したスタッフが購入していた薬剤についてまで責任を負うことはできない」、「以前からいるスタッフのしたことまで責任は負いかねる」、などいろいろな意見が寄せられました。またメールを用いたアンケート調査について不慣れな研究主任がおられ、自分には関係がない内容だと一読して判断され、返信をしてくれないケースが多く見受けられました。「残念ながらメールを毎日見る習慣がない」、「パソコンが現在故障しており復帰の見込みがない。自分のところには文書で連絡して欲しい」、など対応に苦慮する返信もありました。

数回のメール依頼のあと、音沙汰のない10人ほどの研究主任には直接電話かPHSで連絡することで、約2ヶ月にわたり難航した1回目のアンケート調査は完了しました。

動物飼育の実態調査アンケートではなかなか通達文書の内容を理解してもらえないケースがあり、「動物というが両生類はどうか」、「動物を持ち出して臓器や細胞を処理するのはどうか」、など予想外の質問が出てきました。オーバーナイトで実験するかどうかという質問に対しても、「数時間の持ち出しは該当するのかどうか」、というような質問もありました。実は基本学科内に動物飼育用のケージを設置し、中央動物施設とは別個にそこで実験動物を飼育している形態を実態調査することが本来の目的でした。このアンケート調査についても研究センター事務部門からの初回アンケートに対して返信率は50%程度、その後は鳴りを潜めるように沈黙状態で、2度以上要求して徐々に返信が増え、やはり残り10件になった時点で直接交渉となり、難産の末に100%返信を獲得したような次第です。今後の課題としてアンケートに非協力的な主任には交替を要求するような思い切った作業が必要になってくるかも知れません。

情報交換会としての講演会企画

研究主任部門主催の研究発表会を企画し、1つのテーマに対して基礎医学と臨床医学からの両面から複数名が同時に発表する研究発表会が開催できるような企画も今後実現したいと考えています。

問題は、3施設の研究主任および研究員が集まって会を開くのに適切な場所を選択することです。テレビ会議を開催する案、川越ビルを利用する案、も考えています。できれば講演記録を残し、これを医学会雑誌に掲載すること、また大学院生が参加した場合には単位を取得できる、などメリットも持たせた会にしたいと考えています。

おわりに

学内グラント申請書を閲覧する度に、優秀な研究者が学内に沢山おられることを実感します。そこでこれから研究をスタートさせたいと思っている若手研究者が適切な指導教官を見つけてわくわくした研究の領域に踏み出せる体制、似た領域あるいはお互いが支援し合える研究を別個に進めている研究者間の交流を図れる体制、これらを整備する努力を研究主任部門としては手掛けていきたいと願っているところです。